

①「急就奇觚與衆異羅列諸物名姓字分別部居不雜廁用日約少」



「秦漢時代の瓦当と磚文」

⑩「急就章磚」 後漢時代

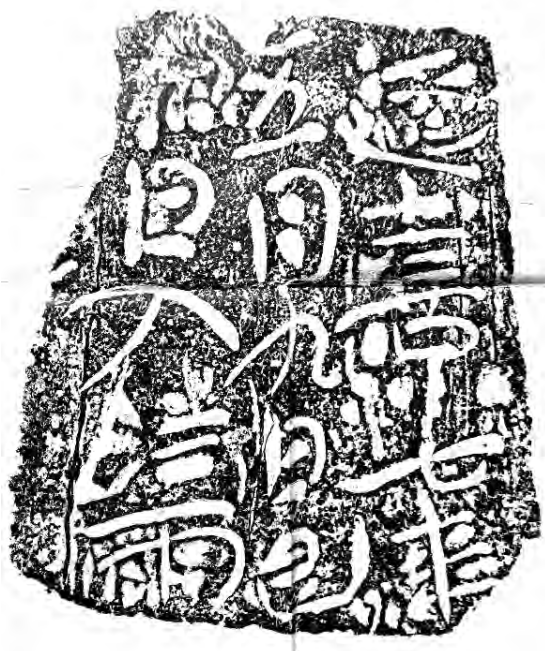
④ 萬□磚



② 延熹五年磚



③ 延熹七年磚



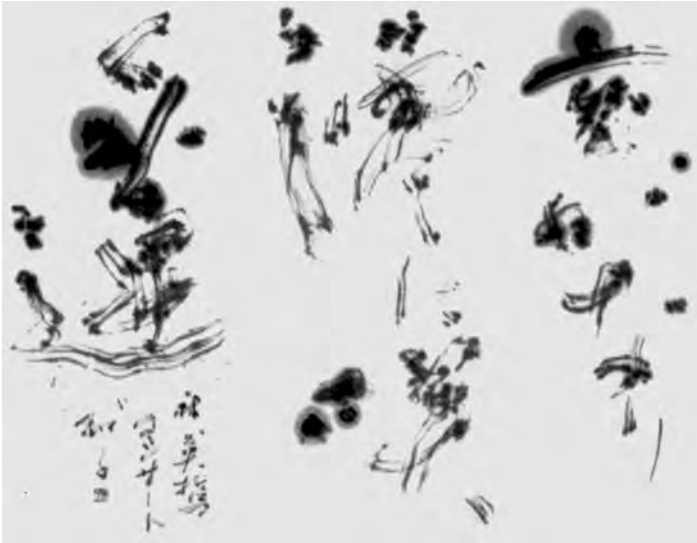
急就章は、千字文と同じような用途の、漢字学習の文である。千字文よりも古く、漢時代の前漢末の史游の作とされる。これを磚に刻したものが伝えられている。書体は、篆書や隸書でなく、前回の刑徒磚を速書きしたような書風である。行書や章草体に近く、筆の抑揚や筆勢が強く感じられる。瓦当や磚文の多くは、型押しで制作されたので、焼成前の土が軟らかい状態の時に、ヘラなどで直接刻されたために、毛筆で紙に書き付けたような趣が、上手く再現されている。同じような筆勢のある「延熹五年」、「延熹七年」の紀年のある磚文と「萬□」の磚文を示した。古代人の草卒な趣の書と言ったことが出来ようか。

書道芸術院 平成の群像 (2018)



金木和子

「林英哲コンサートより」



第54回毎日書道展 会員賞受賞作品

金木和子書

拓本と現代詩文書

書道芸術院との関わりは、全国学生書道展の創立の年。それは昭和二十三年自分の誕生の年です。

小学校一年生より、父の友人だった種谷扇舟先生(書道芸術院六代会長)にお習字の手ほどきを受け、全国学生書道展で育てて頂き、書道芸術院展と毎日書道展が中心の発表の場になりました。

何と、全国学生書道展で東京都知事賞を頂いたのは、小学生部、西條八十作詞の「かなりや」でした。あの時、既に現代詩文書をご指導して頂き、書への楽しみを教えて頂いておりました。書道芸術院展の一般漢字部で大賞を頂いたのは、石川丈山の漢詩「鋸山」でした。鋸山は、地元鋸南町を代表する山です。

その後、扇舟先生のお導きにより、現代詩文書部へ移りました。扇舟先生には、中国や日本の古典を始め、幅広く勉強させて頂きました。

特に、扇舟先生ご所蔵の原拓を沢山拝見できたのは、最高の喜びでありました。ここで本物を見る大切さを教えて頂きました。これは、その後の採拓に大きな力となりました。

大学では、(株)青山杉雨先生はじめ書道部の方々と向島にての拓本採拓を機に、書道グラフ(近代書

道研究所)の雑誌での発表になり(株)新倉埴斎氏と採拓行脚が始まりました。

日本上代金石拓本(木崎愛吉編・大日本金石史をガイドブックにして)・墨田周辺訪碑行・東都碑碣探訪(江戸・明治期)・良寛碑・三輪田米山碑・信州碑・吉備路碑・東大寺・瑞巖寺等採拓できた事は、今では大きな宝です。

昨年「上代金石拓本」を、書道芸術院展で一堂に発表する機会に恵まれ、改めて見直すことができました。

今現代詩文書の素材を見るに、詩人「高村光太郎」より彫刻家としての芸術家の内面に惹かれたり、純粹さを思わせてしまう叙情詩人「中原中也」、一行一行自分に迫ってくる「吉田一穂」等から、能・音楽・美術など他芸術との感動から心打つ言葉が書きたくなくなっていました。

この作品は、戦前、朝鮮の植生研究や美術研究に功績があった(株)浅川巧氏を題材に、太鼓演奏家・林英哲のコンサートを聴いた時の感動でした。

今まで長く続けてこられたのは扇舟先生はじめ、先輩諸先生方のお蔭と感謝しております。

今後共よろしく願ひ致します。

書のひろば

理事長 辻元大雲

第71回書道芸術院展実行委員会 各部署長反省会開催

3月1日院事務所にて第71回書道芸術院展実行委員会各部署長による反省会が開催された。昨年6月の運営委員会・実行委員会からスタートした第71回展の総括的な反省、各部署長からの詳細にわたる実施報告と反省点などが検討され、第72回展へ引き継ぐことになった。今回展の大きな変更は作品サイズが全資格にわたり一回り大きくなったこと、開催時期が早まり会場も3・4棟中心となり、鑑別審査も一般公募・無鑑査は年内開催となり、総務部・審査部・陳列部などに大きく影響したことが挙げられた。表彰式・祝賀会などはほぼ例年通りに実施できた。作品解説会・研究会を従来より2回増やして鑑賞者への配慮を行ったことも好評で、次回展も継続することが提案された。その他詳細は別記第71回展実施報告を参照されたい。

財団通常理事会開催 30年度予算・事業計画など審議

平成30年度予算・事業計画などを主要議事としての公益財団法人書道芸術

院通常理事会が3月15日院事務所にて開催された。

主な議事・審議事項は

- ・平成30年度事業計画
- ・同予算案、人事、会則変更
- ・第72回展関係人事（昇格など）
- ・単位認定講習会、秋季展、創立記念日講演会など

平成30年度の事業計画はほぼ例年通りの内容で実施されるが全国学生書道展が70回の記念展を迎えることになり、記念事業を企画する。記念賞の設定、目録の充実、席上揮毫会などできる範囲で行う予定。

予算面では昨年まで第70回展記念事業を行ったが、本年度は平年通りの組み立てを行っている。人件費などで経費節減を行った。

事務所人事で永年会計部長としてご苦勞いただいた白石和楓さんが本年4月で勇退され、新たに前衛書部審査会所属の近藤尚子（雅号 木原尚子）さんが院会計担当職員として就任されることになった。今後半年間事務引継ぎなどで白石さんは近藤さんのバックアップに当たっていただくことになっている。白石さんの永年のご苦勞ご貢献に感謝申し上げたい。

会員規則の変更では院審査会候補以上の会員に月刊「書道芸術」誌を会報として年会費と共にご購入いただくにしている件に関し、会報購読料年間450円を諸物価、送料などの値上りに伴い500円増額して500円とさせていただきます。

とになったことに伴い会則を変更させていただいた。「書道芸術」年間購読実費は送料共930円であり、ご理解いただきたい。

第72回展昇格人事は規定による審査会員、審査会候補、無鑑査への昇格を承認し、5月の理事会にて参与会員・常任総務・総務など審査会員の役員人事を検討する。昇格通知、辞令などは決定次第当事者宛送付する予定。

なお財団理事は2年間の任期満了に伴い改選を6月9日開催の院評議員会にて決定する。6月16日に新理事会を開催、理事長・常務理事の選任の後、新理事体制が発足する。当日引き続き第72回書道芸術院展運営委員会を開催して運営大綱、当審査員など運営人事も決定する予定。

その他詳細は別記「院報」にて報告。

院第2回企画委員会開催

3月15日文具会館にて院第2回企画委員会が開催された。当日青木法律会計事務所青木文氏に税制問題についてご講演をいただき、あまりよくわからない税制について分かりやすい内容でお話しいただいた。1時間と時間が短く十分な内容とはならなかったようでも申し訳なかったが、ユーモア溢れた具体的な身近な内容にも触れて頂き有意義な講演であった。

引き続き行った企画委員会では院のこれからの様々な運営の在り方、事業

の見直しや新しい取り組みなどについて活発な意見交換が行われた。検討内容は今後更に煮詰めて成案ができたところで理事会に具申されることになっている。

- ・企画委員会メンバー
委員長 下谷洋子常務理事
(漢) 岩垣若翠・川村美泉・児玉頼光・那須野明花・藤井龍仙・松浦錦扇・三浦郷街、(か) 九條純代・小島孝子、(現) 大隅晃弘・北嶋菁湖・武山櫻子、(箋) 大沼樵峰、(前) 大嶋珀暉・工藤永翠・佐々木浩子

毎日新会員展盛況に開催

第70回毎日書道展から会員に昇格する作家の作品展が3月5日から31日までアートサロン毎日で開催された。今年で25回目となり、今回は151人が出品。4期に分けて開催、16日には理事監事らが激励に駆け付けて出品者懇親会も賑やかに開催された。

- ・本院関係出品者
I期 朝倉希代子（大）京絹子（か）
II期 岩崎陽光（近）金濱珀燁（近）
III期 都丸みどり（か）治田芳江（か）
長峯万扇（大）藤原小翠（大）
IV期 藤原紅雲（前）



前衛書 (一)

大井 美津江

「書への出発」

群馬県立高崎女子高校に入学した私は、書道の時間を楽しみにしていました。でも、予想だにもなかった衝撃的なことが起きたのです。「こんな字、どこで習ってきた?」15歳の少女には、何でこのようなことを言われるのかが良く理解できませんでした。

その一言が…悔しかったと思うので



大井美津江書

「生」

ですが、不思議なことに、一層

書に引きつけられていったの

です。どうしたら、先生によ

い評価をいただけるかと懸命

の日々でした。以来書くこと

が楽しくなり、書に心から向

き合うことができるようにな

りました。

2年生の時、群馬県展の青

少年部が当時あり、前衛書に

近い作品を出品し、入選しま

した。

古典と共に、その時に書い

た前衛的な作品の線質が新鮮

で魅力があり、興味を引かれ

ました。今、振り返るとこの

県展への出品作が前衛書との

出会いだったのだと思います。

書の「真」に思いを寄せて、

自分の心を筆に乗せひたすら

線を引く歳月を重ねつつ、半

世紀が過ぎていきます。

21世紀の書

—私の主張—

現代詩文書 (一)

小池 蹊 舟

古典の臨書

—木簡に魅せられて

〈古典と創作〉

「古典の臨書と創作は、車の両輪である。どちらが欠けても前には進めない。」故種谷扇舟

先生は常々言われておりました。

「たとえ壁にぶちあたり、先が見えなくなる事があっても、古典の臨書をする事により、必ず道は拓かれる。」とも。その教えを守っています。

長い年月風雪に耐えた古典の

息吹が伝わって

きます。何とかこの線を作品に取り込めないだろうか? 試行錯誤しながらも何とかまとめあげた作品です。木簡の臨書をお勧め下さった辻元先生に感謝しております。

これは面白い!! 木簡から古の人々の

息吹が伝わって

きます。何とかこの線を作品に取り込めないだろうか? 試行錯誤しながらも何とかまとめあげた作品です。木簡の臨書をお勧め下さった辻元先生に感謝しております。

これは面白い!! 木簡から古の人々の

息吹が伝わって

きます。何とかこの線を作品に取り込めないだろうか? 試行錯誤しながらも何とかまとめあげた作品です。木簡の臨書をお勧め下さった辻元先生に感謝しております。

これは面白い!! 木簡から古の人々の

息吹が伝わって

きます。何とかこの線を作品に取り込めないだろうか? 試行錯誤しながらも何とかまとめあげた作品です。木簡の臨書をお勧め下さった辻元先生に感謝しております。

これは面白い!! 木簡から古の人々の

息吹が伝わって

きます。何とかこの線を作品に取り込めないだろうか? 試行錯誤しながらも何とかまとめあげた作品です。木簡の臨書をお勧め下さった辻元先生に感謝しております。



第68回毎日書道展出品作

小池蹊舟書

書道芸術院春華賞

「朝焼けの地球」



千田 春月



現代詩文書部
千田 春月

この度、第71回書道芸術院展で春華賞を賜りました。辻元大雲理事長はじめ院の諸先生方には深く御礼申し上げます。また師匠である小竹石雲先生、日頃よりお世話になっております先生・先輩方、書友の皆様により感謝申し上げます。

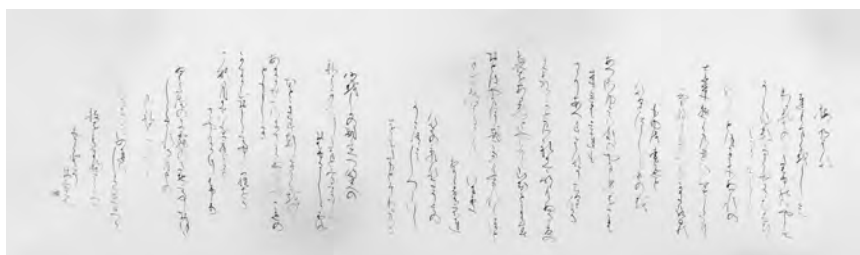
長い歴史と伝統ある書道芸術院におきまして、私には余りにも重い賞で平常心とは程遠い気持ちで表彰式、祝賀会へと臨みました。しかし、厳しくも温かい励ましのお言葉の数々に、我に返り前に進む覚悟の様な気持ちが生えて参りました。

数年前、「山に登ったらその山は下りて、次の山に登れ」と話された辻元先生のお言葉を記憶しております。これを心に留めて、一歩ずつ前進して参りたいと思います。詩情豊かな作品を永遠の課題として精進して参ります。

今後とも一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

書道芸術院大賞

「万葉集・古今集より」



濱田 竹雪



かな部
濱田 竹雪

この度、私のような若輩が大変栄誉ある大賞を頂き、驚きと喜びでいっぱいです。

書道芸術院の諸先生方、そしていつも応援してくれた家族の支えのおかげと深く感謝しております。かな作品ではしなやかで艶のある美しい線を目標に墨の変化、リズムを心がけて取り組んでいます。ですが、墨の潤渇がなかなか表現できず思い悩んでいました。日頃より熱心にご指導してくださる板垣洞仙先生、いつも温かくかなの魅力を指導してくださる下谷洋子先生に巡り合えたことが最高の幸せです。心より御礼申し上げます。

これからも様々な書を学び、古典の勉強も大切にしていきたいと思っています。この受賞を糧に一歩ずつ前進出来るように更に精進したいと思います。今後ともご指導を宜しくお願い致します。

第71回書道芸術院展

〈1〉

書道芸術院準大賞

「野分に寄す」



永井 鳳雪

「ふくみの文」



佐藤 桂鳳

「白居易詩」



大窪 翠村

「中秋望月」



森田 藤谷



「ミルキーウェイ」

高原 紗秀

白雪紅梅賞



「gush forth」

後藤 美希



「兆す(きざす)」

嶋 由香



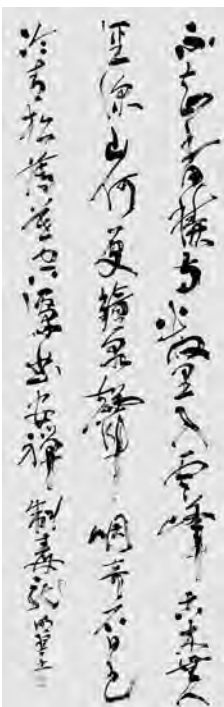
「冬薔薇」

坂本 蓉花



「風景との対話」

小野寺久美



「過香積寺」

田畑 明琴



「夢姉」

土屋 恵仙



「江南旅情」

熊谷 桃華



「王維詩」

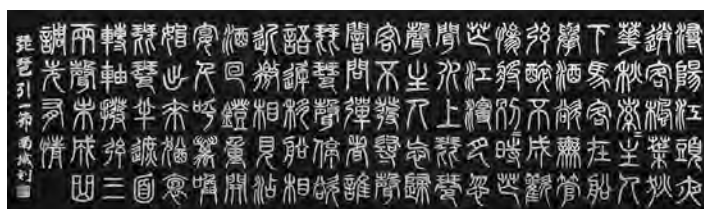
佐藤 華紅

白雪紅梅賞



「アラブを訪ね 自詠」

大橋 佑朋



「琵琶引并序」

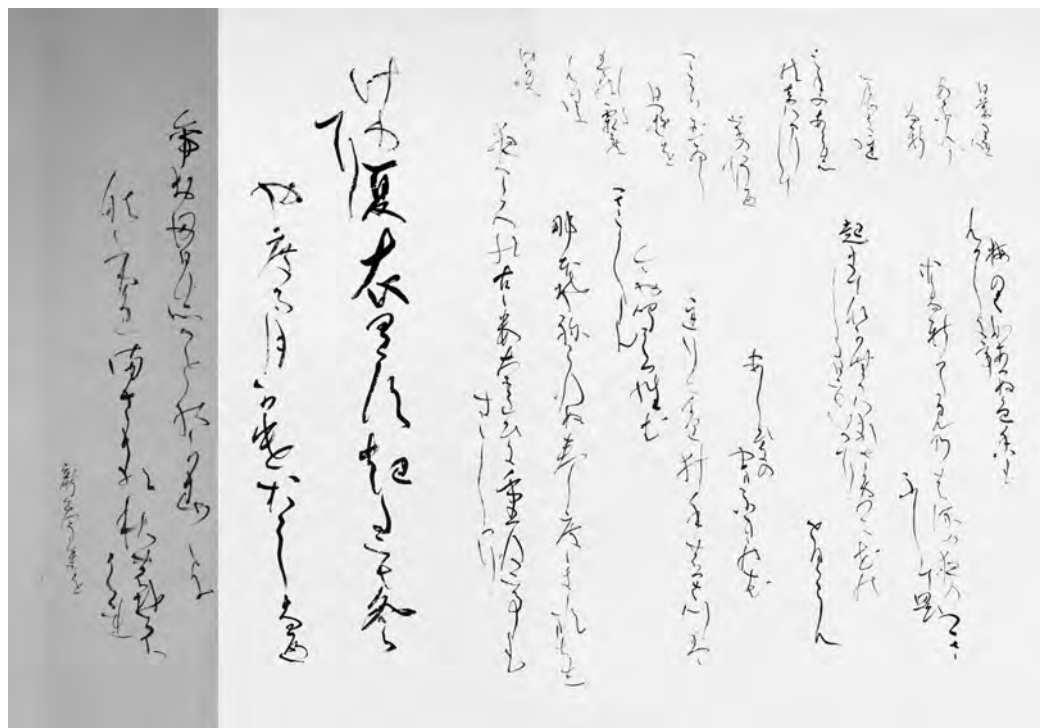
久保村南城

〈第70回書道芸術院展で選抜（春華賞・記念賞受賞者）された大作コーナー〉



「夢大地北海道」

佐久間幸扇



「梅の花」

松村くに子



「いのちの炎」

真下 京子

古典鑑賞

395

多胡碑① 奈良時代

〔解説〕多胡碑は、山上碑（681）・金井沢碑（726）とともに「上野三碑」といわれている。この三碑は群馬・高崎市南郊に残る日本最古の石碑群として、昨春秋「ユネスコ世界記憶遺産」に登録された。多胡碑は、和銅4年（711）の旧多胡郡の建郡を記録した石碑である。明治13年に清国公使の随員として来日した楊守敬（1839～1915）は、師の潘存と著した楷書字典『楷書溯源』の目録中に「日本国片岡緑野甘良三郡題名残碑」として紹介した。碑文の書風は、南北朝の北魏に見られる雄渾な六朝楷書に近く、鄭道昭の書風に通ずると評されている。

※原碑を毎月2行ずつ掲載します。

（編集部）

— 原碑全体写真 —



※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみ可）

弁官符す。上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡并せて三郡の内、三百戸を郡と成し、羊に給いて…。



（掲載図版原碑より25%縮小）

漢字研究部臨書課題

＝（半紙普通判・縦使用）上記の図版より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

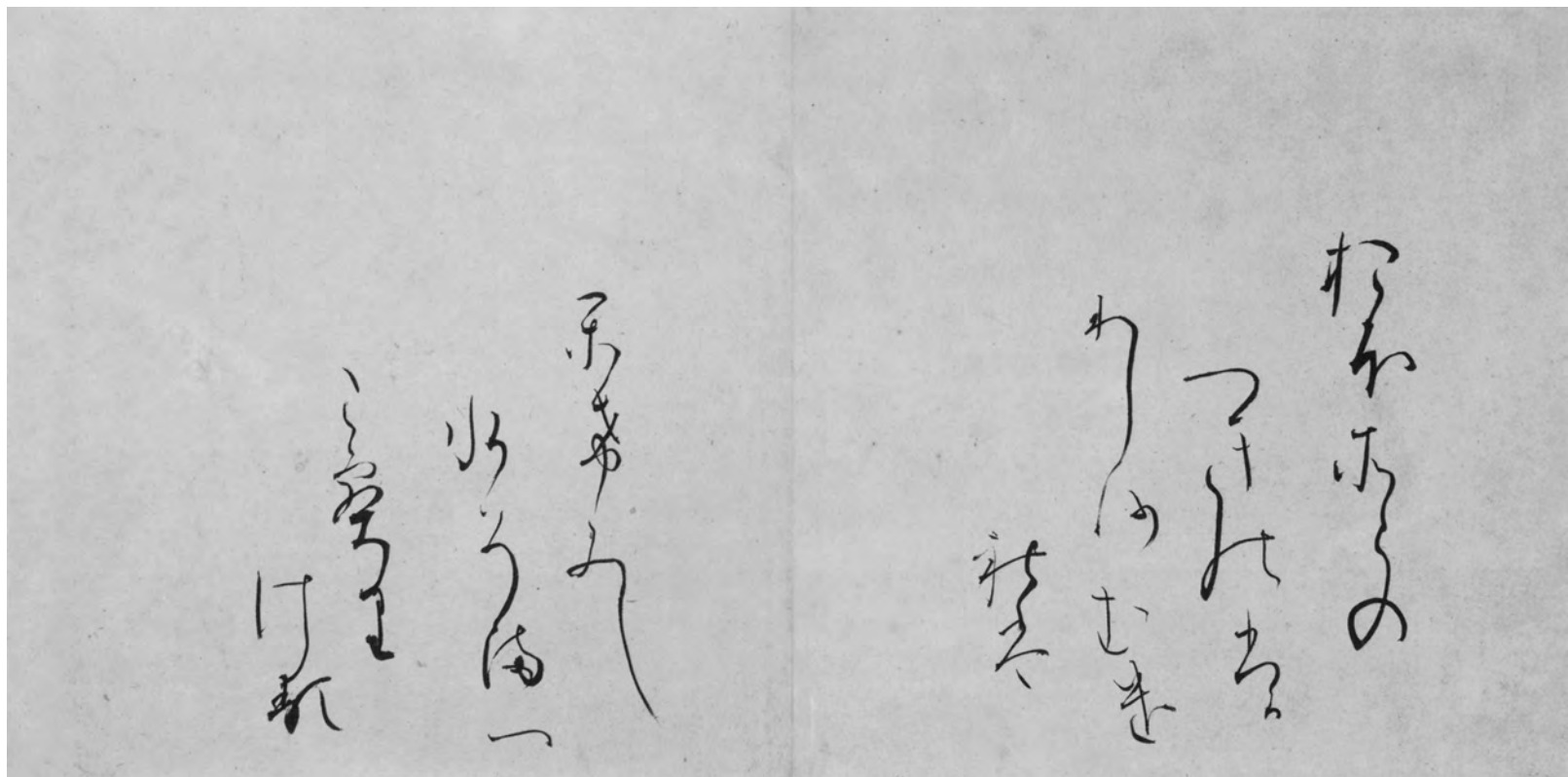
＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の上記掲載部分以外も可。

継色紙

① (伝小野道風筆)

※落款を必ず入れる。

署名、もしくは〇〇臨
(押印のみ可)



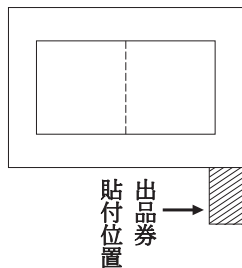
(徳川美術館蔵)

かな研究部臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・横長に
使用) 別紙を裁断して貼付も可。
上記の古筆の掲載部分の歌一首
を原寸で書く。

特別研究部臨書課題

(毎日展公募サイズ以内・縦横
自由) 上記の掲載以外も可。



〈よみ〉

おほぞらの

かげみし

つきのひか

水ぞまづ

りしさむけ

こほり

れば

ける

〔解説〕「継色紙」は、伝紀貫之筆「寸松庵色紙」、伝藤原行成筆「升色紙」とともに、三色紙と呼ばれ、平安朝屈指の古筆として尊重されている。『古今和歌集』『万葉集』などの古歌を書写した歌集の断簡で、方形の料紙二枚に歌一首を継ぎ書きにしている。「継色紙」の名がある。もとは縦13.4cm、横26.8cmの鳥の子の料紙を二つ折りにして粘葉装にした冊子本であった。現在ではすべて色紙形の断簡として、三十数葉伝わっている。料紙の美しさも大きな魅力のひとつで、白い素地の他、薄紫・藍・薄藍・黄・赭・草など種々の色を用いた豪華な調度本である。

(編集部)

※掲載図版は90%縮小。

漢字規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

小竹石雲選書

至誠如神 よみ（至誠は神の如し）

書体Ⅱ自由



習い方解説 (一)

小竹石雲

至誠如神
(至誠は神の如し) (中庸)

- 素直に愚直にとの思いで木簡を基調に筆を執った。
- 線は深く重厚な線質になるように心がけた。
- 運腕を大きくして伸びやかな線になるようにとめた。
- 一字のうちに強調する線を中心にリズムをとるようにした。
- 筆は羊毛中鋒で濃墨を使い全神経を集中して書くようにしよう。

漢字規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

尾形澄神選書

習い方解説 (一)

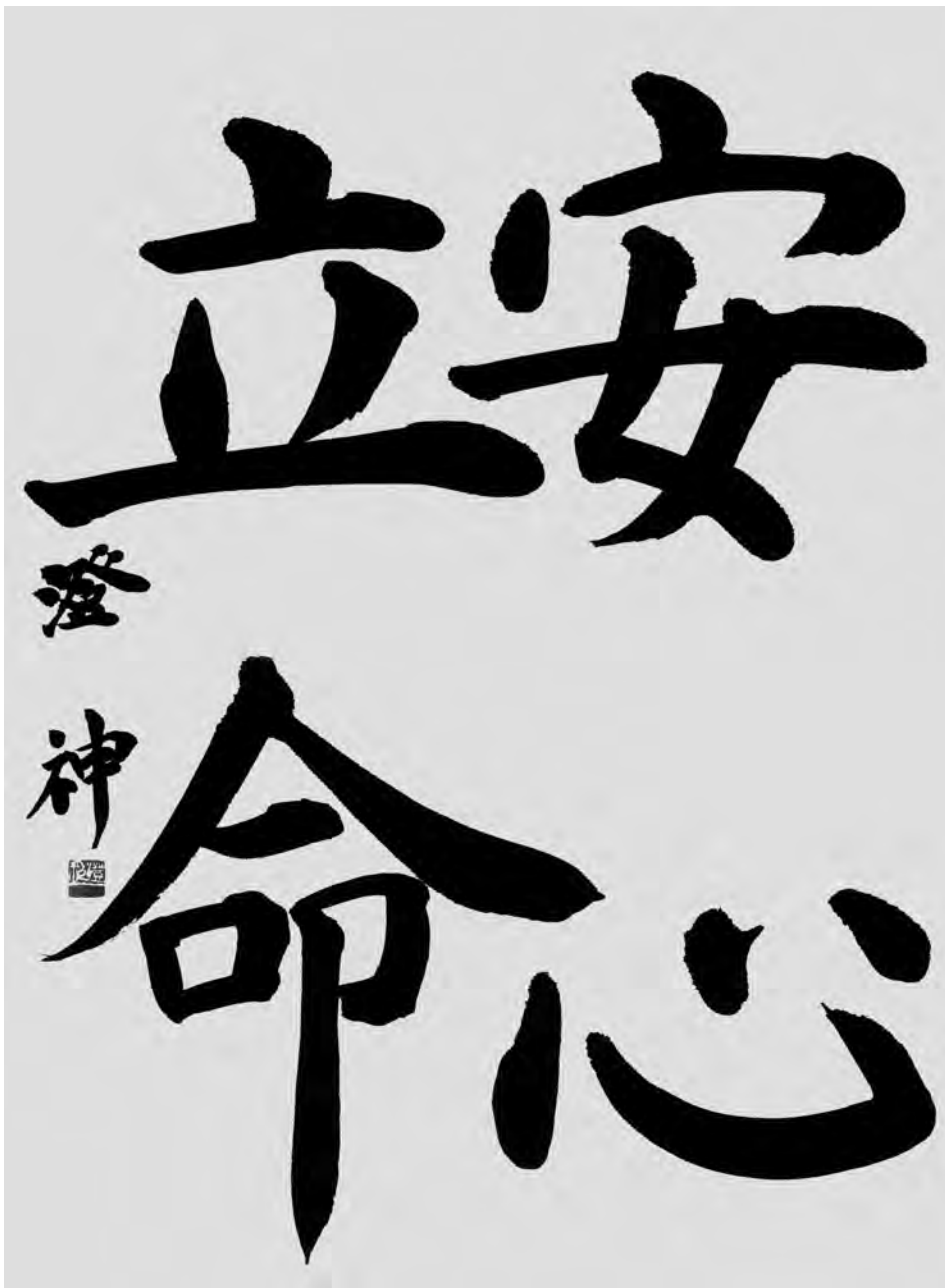
尾形澄神

安心立命（仏教と儒教の用語）
（安心立命）

人力を尽くし、その身を天命に任せ、どんな場合にも動じない。

王羲之七世の孫にあたる智永と、その智永に書を学んだという虞世南の二人の書風を念頭に置いた。智永は真草千字文（真は楷書、草は草書）を八百余本書いたと伝わり、虞世南は孔子廟堂碑という楷書の名品を残し、初唐の三大家の一人としてその名を馳せる。のびやかな横画と右払い、一見穏やかであるが、内に骨力を蔵する外柔内剛の筆致を心掛けた。

『心』二画目の収筆は三画目の点の起筆部へ向かってゆっくり離筆し、三画目の点の収筆は四画目の起筆へと気脈が続く。楷書と言えど筆脈は大事。筆は径0.5cm、鋒長4.5cmの仮名用兼毫筆を用いた。9月まで同じ筆を使います。



安心立命 よみ（あんじんりょうみょう）

書体Ⅱ楷書

かな規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

下谷 洋子 選書

習い方解説 (一)

下谷 洋子

あたなりと名にこそたてれ桜花
年としにままれる人もまちけり

（古今集・読人しらず）

かなを語る時に外せないのが日本という国の風土や、日本人としての国民性です。石川九楊著の『日本論』に、その辺の事情が詳細に書かれていますので、是非ご覧下さい。

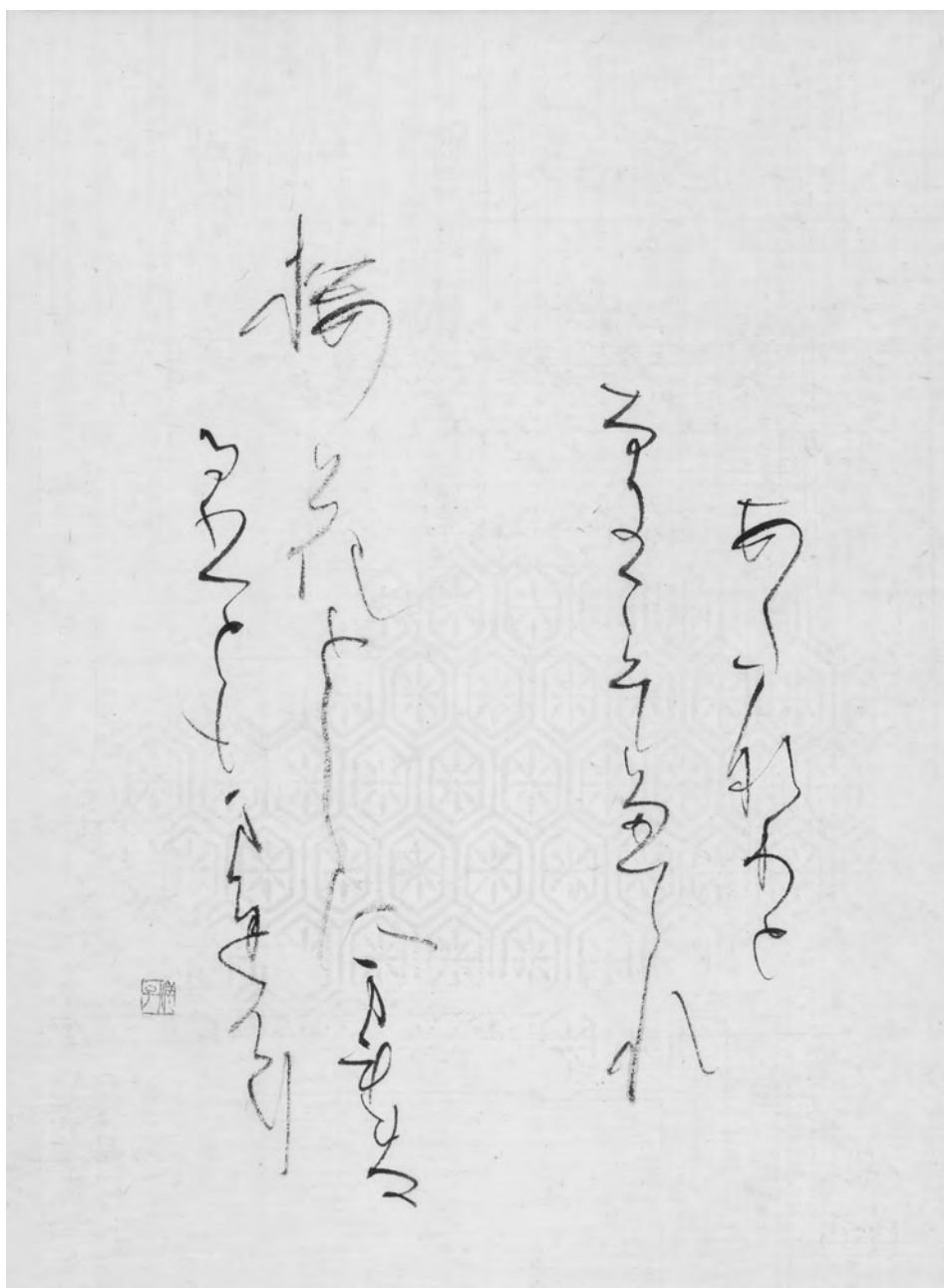
かなの散らし書きは日本独特の美意識ですが、美とは何かと、問われたら「分かち書き」の寸松庵色紙を一枚差し出せばすむ…と氏は述べています。分かち書きとは上の句と下の句を二つに分けて書く書式のことを指します。

今回は、その分かち書きを基に上の句の桜花を後半につけ、しかも漢字で大きく山場としてみました。小字は古筆にのっとりたいたですが、想像力を働かせ、オリジナルを考えたいものです。

すぐに散ると評判の桜、たまに來てくれる方でもちゃんと待っている…の意。

よみ方

あた(多)な(那)り(利)と名(奈)に(尔)こそた(多)てれ桜花
年(とし)にま(万)れ(連)な(奈)る人(悲)とも(毛)ま(万)ち(遅)け(介)り



かな規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1 $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真の和歌を臨書する。または部分 (2字以上の連綿) を臨書する。

粘葉本古今和歌集
(掲載写真拡大111%)



よみ方 いに(二)しとし(志)ねこじにうゑしわが(可)やどのわ

か(可)ぎ(支)のむめはゝな(那)さき(支)にけ(遣)り 安倍広庭

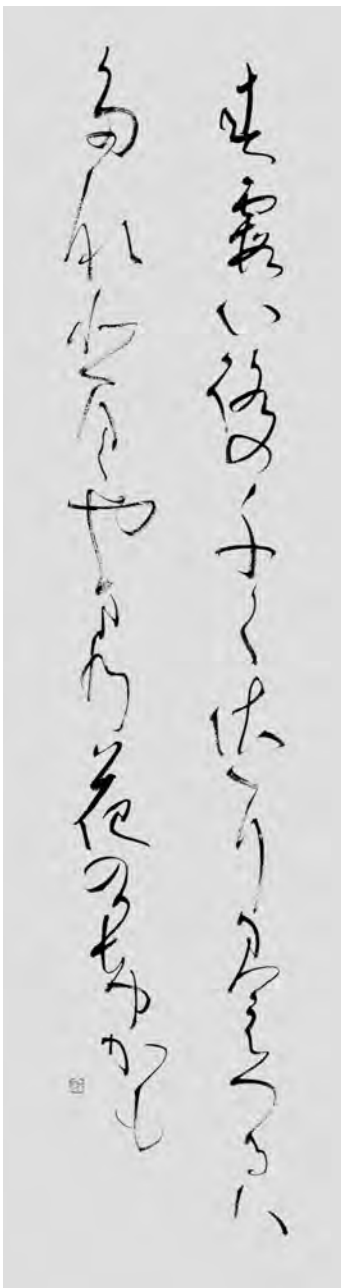
習い方解説 (一)

善養寺 紅 風

春がすみ色のちぢく久さに見えつるは
たなびく山の花のかけかも
(古今和歌集)

かな条幅規定 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

善養寺 紅風 選書



よみ方 春がすみ(霞)色(い路)のち(千)ぢく(久)さ(佐)に(耳)見えつるは(八)

た(多)な(那)び(悲)く(具)山(や万)の(乃)花のか(可)げ(希)かも

半切縦作品を書く時は、漢語を生かして28文字位までに収めると良いでしょう。自然な流れやリズム、疎密等に気を配り運筆します。墨量が多いと重くなりがちですが、筆圧や運筆の速さで墨色の変化は出せます。渴筆部分は1行目との響きを考慮しゆっくりと運筆して下さい。

千種は、種類の多いこと。
※タテ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

習い方解説 (一)

種谷萬城

今人不見古時月 今月曾經照古人
今人不見古時月 今月曾經照古人

今人不見古時月 今月曾經照古人
(今の人はいまひとみみず古時のつき 今の月は曾經て古人を照せり)

書体Ⅱ自由

李白詩を西周の金文(青銅器の銘文)に拠り書きました。漢字最古の書体が篆書(甲骨文・金文・小篆・印篆など)です。篆書作品制作には、専門の字典で校字・蔵鋒・中鋒の筆法、左右相称・等分割など、楷行草書とは異なる書法の学習が必要。古人の造字感性に触れ、漢字成立を考察する。篆書研究の醍醐味に是非挑戦下さい。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

川島舟錦選書

習い方解説 (一)

川島舟錦

四時逸興看花木一片
閒心對水雲
舟錦書

四時逸興看花木 一片閒心對水雲

(周明新)

(四季のたのしみは花やもみじを見ること、わが閒寂な心は常に行雲流水に對する。)

書体Ⅱ自由

山々の新緑が目まぶしい春の到来。咲きはこる花に目をやりながら、鳥のさえずりに耳を傾ける。自然を愛でる間もなく時が過ぎ去ってゆく。ゆっくり四季の花を楽しむ時間をいとおしく思う。四月。気持ちを新たに、まずは楷書体から始めてみましょう。

書を究めるといふ事は

造型意識を養うことであり、

この世の造型美に眼を開く

ことである。

高村光太郎書についてより 晃弘書

用紙Ⅱはがきの大きさ(14.8×10 cm)、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

習い方解説 (一)

大隅 晃弘

ペン字の書は、日常メモとしての単なる情報表示としてではなく、その書きぶりによって、読み手への敬意を表したり書き手の自尊心を満足させたりする効果があるようです。昨今の「美文字」ブームによって、様々な教材が書店に並んでいるのも、その効果が周知され始めているからでしょう。

しかし、一見整い美しく思えても、画一的なフォントに似た、ぎこちなく味気ないペン字の書を目にすることがあります。書芸術に心得のある皆さんならば、整齊の品格を持ちながら書き手の思いが伝わる人間味のあるペン字の書を目指してほしいものです。手本を凝視しながら真似事に専念することも大事ですが、書き手自身のリズムで自然な流れを意識して書くことが必要です。

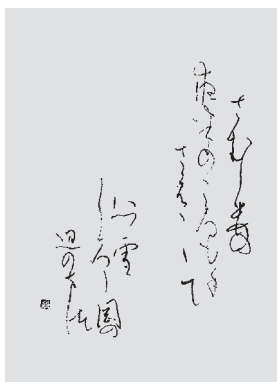
※落款(自分の名前)を必ず入れる。

木一作品 各部総評

NO. 682

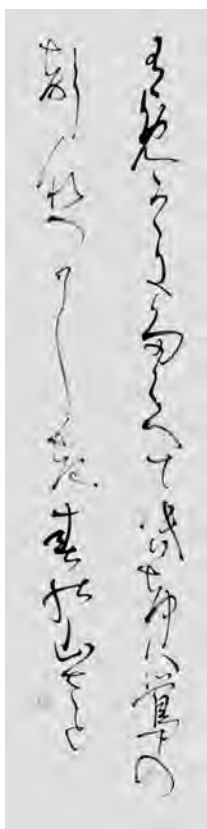
かな部 師範 大嶋 信子

漢語を巧く使って作品にメリハリを出し、散らし方、字の大小などすっきりと爽快にまとめました。
◎かな部総評 参考手本の解釈が十分なされない作が多く、かな遣いの誤りや全体のバランスなど、見苦しいばかりでした。(洋子評)



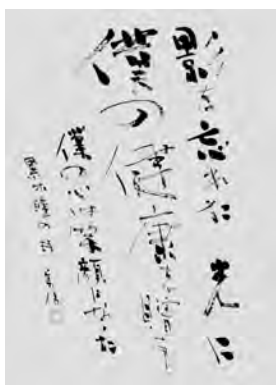
かな部 師範 高橋 由利

抑制のきいた筆致での過不足ない表現は美事。天性の字形の良さが余白美ともなり静けさが漂う。
◎かな部総評 香、鶯の誤字散見。字粒の極端な大小は不自然。正しさと美しさの両立する流れのよい作品を制作のこと。(明子評)



現代詩文書部 特選 平塚 美保

多字数の素材にもかかわらず、作品に吸い込まれる書きぶりに作者の純なる思いが伺え、誌上豊か。
◎現代詩文書部総評 全体的に素材に向き合う表現力が向上して期待感を持つ。(弄石評)



漢字部 師範 富原 扇水

草書主体の安定した二行構成作。潤渾大小の変化も自然で、切れ味ある筆致がリズムを醸し出す。

前衛書部 特選 鈴木 春江

筆毛の特質を駆使し、躍動感ある線は爽やかである。発想力と表現力が融合した魅力的な作。
◎前衛書部総評 変化を求め努力する過程が見られ心強く感じた。更なる錬磨を期待する。(蓮紅評)



◎漢字部総評 上級二行書安定した表現で可。更に多彩な取り組みを。下級一行書はバランスに一考を。落款の調和も。(大雲評)



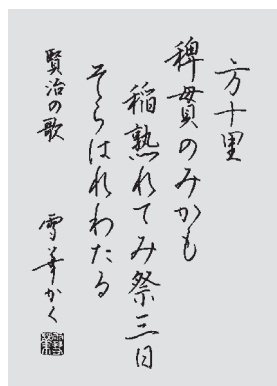
漢字部 師範 豊田 翠玉

漢代木簡を基に創作。筆法に熟達し、太細、曲直の変化を工夫。疎密と柔らかい波瀾の表情が魅力的。
◎漢字部総評 上級は多彩な表現の作品が見られた。隷書作品には基本的な書法が未熟なもの多見。幅の広い学書に期待。(萬城評)



ペン字部 師範 権代 雪華

深みのある重厚な線条で見事に文字を立体的に表現。ペン字の真骨頂ともいえる格調高い作品。
◎ペン字部総評 全体の調和よく、伸びやかな作品が多かった。文字数が少ない作品は、特に天地左右の余白に工夫を。(孝予評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

漢字 (大拙社)

畠中成山

「李白の詩」



畠中成山書

135×70cm

◆ たつぷり横へ拡がる造形が紙面全体に広がりを与えている。やや飛白が多すぎたか。墨の濃度再考を。(大雲評)

◆ 月下の縦画は見事で圧倒される強さがある。作品全体から作者の情熱が伝わる。渴筆を少し抑えれば更に良。(鄭雲評)

◆ スピード感ある木簡調の2行書。逆筆による冴えた線質と、筆勢で魅力ある作品表現となった。(青雲評)

◆ 直線の粘りに気骨が窺えます。渴筆にリズムを感じ、紙面を走る筆勢に圧倒されます。(多希子評)

臨書 (蓮紅) 千葉華紅「針切」



千葉華紅臨

35×135cm

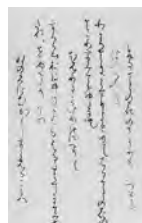
◆ 細く鋭い線の特徴をよく捉えている。渴筆部分では、筆を捻転しながら書き進み、終筆までゆるぎない。(多希子評)

◆ 針切の鋭い細線がよく表現されている。行の流れのリズムも自然で、観察眼の確かさを買う。(大雲評)

◆ 筆先の弾力を駆使し細いシャープな線質を生む。太細強弱のリズムと共に紙墨とが相俟り見事な作品。(青雲評)

◆ 特に中央の濃茶の部分の潤筆部はふっくらと力強く、渴筆部は細く厳しい線で、針切の魅力伝わる。(鄭雲評)

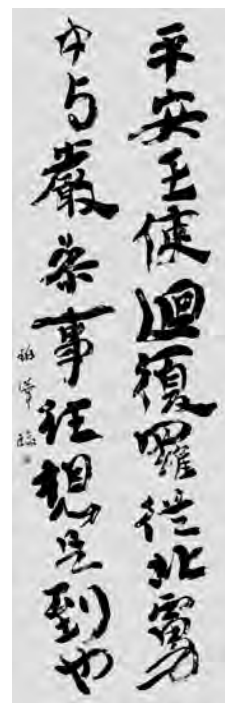
部分拡大



臨書

(蒼原)

金濱珀燁「李柏尺牘稿」



金濱珀燁臨

168×53cm

◆ 濃墨による粘りある線質を生かし、原帖の素朴なやや粗いタッチをよく捉えている。更に大胆さを。(大雲評)

◆ 羊毛筆による温潤な筆線が印象深い。大小・疎密の変化に富んだ特徴を生かし情感ある臨書作品となった。(青雲評)

◆ 筆の開閉が巧みで古典の字形の変化をよく捉えている。大きな構えと堂々とした表現である。(鄭雲評)

◆ 変化に富む太細の線条を良く捉えている。一貫した筆力ある筆勢は躍動感に溢れている。(多希子評)

阿部邑里



「心象II」

180×60cm

阿部邑里書

◆紙面全体にリズムよく展開し、大胆に取り組む姿勢を買う。下部の曲線がやや気になる。
(大雲評)

◆上部と下部の墨量の変化が調和している。下部より中央へ向かう飛沫が動きを生み、豊かに表現された。
(多希子評)

◆躍動感ある運筆の妙。上部に呼応し、下下部が響きあう。飛沫と濁筆で、余白の「白」が一段と美しい。
(青雲評)

千葉紅雪



千葉紅雪書

180×60cm

◆集団ごとの潤濁が遠近の美しい景色を創り出している。上下の余白が一層作品を明快に感じる。
(多希子評)

◆淡墨であるが、墨を含む部分は逞しい線で懐が広い。字間と行間の変化により周りの白が美しい。
(鄭雲評)

(青雲評)

「文屋亮歌集より」

◆独特の青淡墨の潤濁を生かし、心地よいリズム感漂う作。濁筆部分やや浮きすぎの感あり。
(大雲評)

(大雲評)

臨書

(たかむら)

浜野永篁「李柏尺牘稿」

◆原帖の大小・太細の変化をしつかり観察し、安定した臨書。やや整い過ぎた感もあり更に意欲的に。
(大雲評)

(大雲評)

◆真摯な臨書姿勢で、行間も広く明るい作品となった。原帖の重厚な線質を意欲的に表現している。
(青雲評)

(青雲評)



浜野永篁臨

180×60cm

◆ゆるぎ無く骨力のある線で構成され、文字の大小も適切。さらに筆の開閉による太細の変化が欲しい。
(鄭雲評)

◆習熟した線条は筆力が充分に発揮され、日頃の鍛錬の賜物と云います。的確な運筆にひるみがない。
(多希子評)

(多希子評)

総出品点数

70点

創作の部(43点)

漢字—7点

かな—5点

現代—12点

篆刻—0点

前衛—19点

臨書の部(27点)

漢字—25点

かな—2点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

大雲 江本 興舟

もく 森田 藤谷

秀恵 阿部 雅悠

「かな」

松延 藤原 三枝子

AI 藤村 昌子

〔現代詩〕

白珠 西山 葵龍

うる 今関 心華

恵雅 板橋 雅邦

〔前衛〕

光風 千葉 光泉

松風 西條 松雲

白珠 工藤 史音

玉州 角張 芳蘭

角田 坂田 翠江

〔臨書の部〕

〔漢字〕

大雲 名取 美袖

翠苑 氏家 久光

樹原 紺野 遊山

白珠 相内 珠莉

大雲 宮原 香扇

漢字研究部
(李柏尺牘稿)

選評 川島舟錦

今月のホープ作品



阿部雅悠

◎漢字研究部総評

丸みを帯びた太細変化のある線や文字の大小を意識しながら、力強い線質で素直に臨書された好感の持てる作品です。さらに書き込むと運筆にリズムが生まれ、動きも大きくなって初期の行書を堪能できそうです。

紙、筆、墨の関係は、微妙に技術を左右するところです。たくさんの用具用材の中から

漢字研究部 特選 阿部雅悠

自分に合うものを試すことをお勧めします。よく鍛錬を積んだ粘りのある線質には、眼を奪われます。筆を深く沈めた抑揚のある作品に到達するのは容易ではありませんが、半紙や筆を用途に合わせ使い分けていると、いつもより書けるといいう手ごたえを感じることがあります。「楽しい」「面白い」という感覚を繰り返して何回か体験したとき、自分の成長が感じられるものです。



桃黄輝紀 咏美
光扇美夫 艸紬



遊睦彩杏 蒼竹
山月香奈 香鳳



奎美英松 惠恵
媛保司 雲仙泉



珠明成光 藤久
葉祥美 泉帛美

第71回書道芸術院展

〈併催＝第69回全国学生書道展〉

〈半紙の部 大賞作品〉



(中) 田村萌奈



(中) 鈴木美紗生



(小) 南有里子



(高) 伊藤真由子



(高) 小川涼葉

ごあいさつ

公益財団法人書道芸術院理事長 辻元大雲

昨年創立70周年記念事業を無事終了しました書道芸術院主催の全国学生書道展は69回目の開催となりました。昨年に続き半紙部門と半切 $\frac{1}{2}$ 部門の二部体制で、全国各地から作品をご出品いただき、半紙部門は前回より約400点増でしたが、半切 $\frac{1}{2}$ 部門は約200余点の減となり、多少の変動はありましたがご出品いただいた生徒の皆さん、指導者、保護者の方々に厚くお礼申し上げます。

作品内容では小中学生は文部科学省学習指導要領に基づいた、しっかりと安定した表現で、課題制作となった半切 $\frac{1}{2}$ 部門も同様立派な作品が多かったと思います。高校大学生は両部門とも創作・臨書など自由な表現で、多彩かつ高度な表現を試みた作品が多くなりました。

審査は一点一点を大切に扱い、公平にまた温かい気持ちで拝見させていただき、各賞を決定いたしました。受賞された皆さんはご受賞を励みとして、これからも色々な場面で活躍して下さることを期待します。

来年は70回の記念展を迎えます。書写書道教育、さらに将来の書芸術文化の振興発展のために本展が少しでも寄与できるよう、努力を重ねて参ります。ご支援ご協力をお願い申し上げます。

〈半紙の部 準大賞作品〉



(小) 清水 咲弥



(小) 山本 春風



(小) 菊地原 基



(中) 岩床 風花



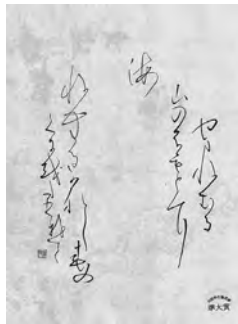
(中) 谷地 由風



(中) 畠 中 ひより



(高) 梶 原 有未



(高) 高橋 優花



(高) 中島 千嘉



(高) 濱田 実

〈 半 切 ½ の 部 大 賞 作 品 〉



(高) 屋 代 真 由



(中) 鈴 木 姫 凜



(小) 奥 本 愛 理

〈 半 切 ½ の 部 準 大 賞 作 品 〉



(中) 鈴 木 倫



(小) 楠 瀬 桃 花



(高) 榎 本 みのり



(高) 穴 戸 あずさ



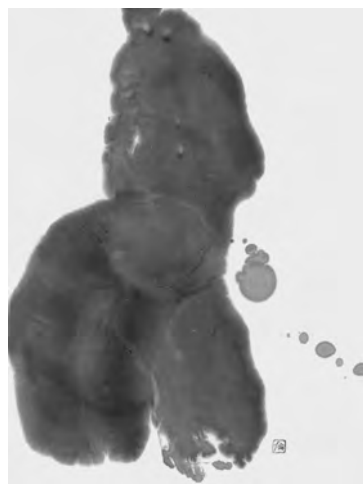
(中) 壺 井 眸 美

第69回 全国学生書道展

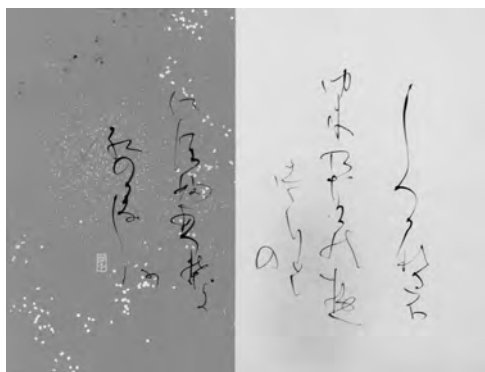
「指導者作品展」役員作品



「槍 (甲骨文・岳)」
顧問・名誉会員 小 伏 竹 村



「洋」
顧問・名誉会員 香 川 倫 子



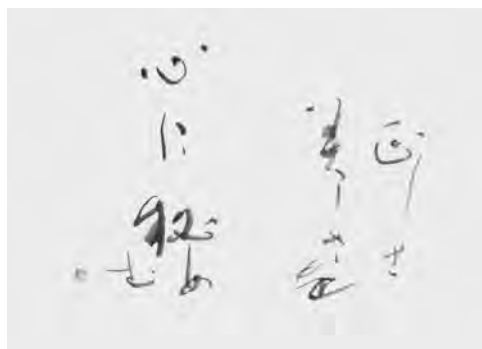
「しづかなる」
常務理事 下 谷 洋 子



「古き世の (蛇笏句)」
理事長 辻 元 大 雲



「金剛心」
常務理事 後 藤 大 峰



「正しく美しく」
常務理事 小 竹 石 雲